

アオウミガメ

Chelonia mydas

カメ目
ウミガメ科

小笠原諸島



環境省



【形態・生態】

直甲長 80 ～ 110cm。体色は背面が濃緑色から黒色、腹面は淡い黄色。背甲の表面が滑らかで、あごの表皮が鋸歯状に角質化している。5月下旬～8月下旬に一度に平均 100 個の卵を 1 シーズン中に平均 4 回産卵する。稚ガメのころは動物食が強く、成長に伴い海藻や藻類の植物食に変わる。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、南西諸島（毎年産卵が行われるのは小笠原諸島と南西諸島に限定）；太平洋、大西洋、インド洋の熱帯から温帯域、および地中海。

【小笠原諸島における生息環境】

砂浜で産卵し、島周辺の海域に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

産卵地の海岸の多くは国立公園内にあることで保全されているが、海洋に浮遊するプラスチック袋や破片を混食し、腸閉塞などを起こして死亡する事例がある。漁業との関連では、本州沿岸の定置網に入り込み溺死する事例がある。また、海岸に上陸した雌の産卵を妨げないような配慮が望まれる。

【関連文献】

山口真名美ら, 2005; 阿部寧・南浩史, 2008.

(執筆者: 長谷川雅美)



アカウミガメ

Caretta caretta

カメ目
ウミガメ科

小笠原諸島



環境省



【形態・生態】

直甲長 70 ～ 105cm。頭部が比較的大きく、下顎が発達。体色は褐色で腹面は淡い。5 ～ 8 月に茨城県以南の太平洋岸および南西諸島で産卵する。1 回の産卵数は約 100、1 繁殖期に 1 ～ 5 回上陸して産卵する。性成熟に 30 年以上かかると推定され、成体は海底の軟体動物や甲殻類を摂食する。

【分布の概要】

日本では、茨城県以南の太平洋岸、南西諸島を中心に見られる。太平洋、大西洋、インド洋の熱帯から温帯域および地中海に生息する。日本における産卵は茨城県以南の太平洋岸および南西諸島の砂浜で行われる。

【小笠原諸島における生息環境】

島周辺の沿岸部で海中を遊泳する個体の観察事例がある。産卵は 2 例記録されている。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

はえ縄や底引き網で混獲される可能性がある。

【関連文献】

阿部寧・南浩史, 2008.

(執筆者: 長谷川雅美)



タイマイ

Eretmochelys imbricata

カメ目
ウミガメ科

小笠原諸島



環境省



【形態・生態】

直甲長 70 ～ 90cm。背甲の鱗板は屋根瓦状に重なり、甲の縁も鋸歯状にとがっている。頭部は細長く、口吻もとがっている。背面は褐色で、腹面は淡い黄色。6 ～ 8 月に沖縄以南の南西諸島で産卵する。比較的定着性が強いとされ、主に海綿類を摂食する。

【分布の概要】

太平洋、大西洋、インド洋の熱帯域、特にサンゴ礁海域に多い。

【小笠原諸島における生息環境】

産卵事例はないが、島の沿岸部の海中で遊泳個体の観察事例がある。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

観察事例が少ないため、情報不足である。

【関連文献】

阿部寧・南浩史, 2008.



(執筆者: 長谷川雅美)

オサガメ

Dermochelys coriacea

カメ目
オサガメ科

小笠原諸島

DD

環境省

【形態・生態】

直甲長 120 ～ 190cm で、現生ウミガメ類では最大種。鱗板や肋骨の変化した甲骨板を有する甲を欠き、ゴム状の皮膚に覆われる。背面に 5 条、腹面に 5 条、体側に 1 条のキールがある。背面は黒色で、白斑が点在することがある。腹面は白斑の占める範囲が広がり、全体に白色になる。熱帯アジアでは 3 ～ 9 月に産卵する。幼体、成体ともに海洋を広く遊泳し、主にクラゲ類を食べる。

【分布の概要】

太平洋、大西洋、インド洋の熱帯域から温帯域。日本では稀に回遊個体が発見される。

【小笠原諸島における生息環境】

島沿岸で、海面を遊泳中の個体が稀に観察されている。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

観察事例が少ないため、情報不足である。

【関連文献】

阿部寧・南浩史, 2008.



© エバーラスティング・ネイチャー

(執筆: 長谷川雅美)

ミナミトリシマヤモリ

Perochirus ateleus

トカゲ目(有鱗目)
ヤモリ科

小笠原諸島

DD

環境省

VU

【形態・生態】

頭胴長 50 ～ 76mm。胴部の背面や四肢には大型の顆粒状の鱗が無く、後肢の後縁には弱い皮膚のひだがある。尾は水平方向に幅広く扁平。樹上性。繁殖など、成体に関する情報はほとんどない。

【分布の概要】

小笠原諸島; ミクロネシア

【小笠原諸島における生息環境】

南硫黄島の海岸樹林に生息する。海岸部から標高 300m 付近まで記録がある。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ホオグロヤモリやグリーンアノールなど外来爬虫類の侵入が潜在的な脅威であるが、現在のところ生息地である南硫黄島への侵入は確認されていない。意図的、非意図的に関わらず、人為的な移入が行われないように留意する必要がある。

【関連文献】

千石正一, 1983; 堀越和夫, 2008.



©NPO 法人小笠原自然文化研究所

(執筆: 長谷川雅美)

オガサワラトカゲ※備考 (p. 351)

Cryptoblepharus nigropunctatus

トカゲ目(有鱗目)
トカゲ科

小笠原諸島

NT

環境省

NT

【形態・生態】

頭胴長 45 ～ 60mm。背面は褐色で、黒褐色または黄褐色の斑紋が散在する。体側には褐色の不明瞭な縦条がある。まぶたは上下が融合し、下まぶたが透明になっている。日の当たる石垣、林道脇の斜面、林床、大木の幹、倒木の上などを活発に徘徊し、小型の昆虫や節足動物を捕食する。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島

【小笠原諸島における生息環境】

海岸から山地まで、日当たりの良い林道の斜面、岩の多い灌木林や林間の果樹園などの地表および樹上で見られる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

外来爬虫類であるグリーンアノールの侵入、ネコやネズミ類による捕食が脅威である。本種の幼体が、グリーンアノールの大型の雄に捕食されていた記録があり、餌資源をめぐる競争だけでなく、捕食の影響も懸念される。

【関連文献】

川上和人・益子美由希, 2008; Hayashi, F. et al., 2009.



(執筆: 長谷川雅美)

【種名・学名などの準拠文献】

種名、配列は、日本爬虫両棲類学会による日本産爬虫両棲類標準和名（2009 年 12 月 6 日改訂案）に従った。

【備 考】 レッドリスト改定時における評価の根拠など補足情報

和名	備考
オガサワラトカゲ	本種は、各島の個体群が遺伝的に分化していることが明らかにされている。父島では特に減少が顕著であり、島ごとにみた場合、NT より 2 ランク高い EN に相当する。

【関連文献】

- 阿部寧・南浩史, 2008. 海亀類の混獲対策 — 海亀個体群の状況と包括的アプローチ. 日本水産学会誌, 74(2): 230-233.
- Hayashi, F. et al., 2009. Limited overwater dispersal and genetic differentiation of the snake-eyed skink (*Cryptoblepharus nigropunctatus*) in the Oceanic Ogasawara Islands, Japan. *Zoological Science*, 26(8): 543-549.
- 堀越和夫, 2008. 南硫黄島のトカゲ類「特集 南硫黄島 2007」. 小笠原研究, 33: 129-134.
- 川上和人・益子美由希, 2008. 小笠原諸島母島におけるネコ *Felis catus* の食性. 小笠原研究年報, 31: 41-48.
- 千石正一, 1983. 南硫黄島の爬虫類. In: 環境庁自然保護局 (編) 南硫黄島の自然, pp. 287-301. 日本野生生物研究センター.
- 山口真名美・菅沼弘行・鳴島浩二, 2005. 小笠原諸島父島列島で繁殖するアオウミガメ(*Chelonia mydas*) の上陸・産卵状況 (2005 年) と過去 27 年間の産卵巣数の記念変化. うみがめニュースレター, (66): 2-6.

